

2019 年度 病院医学教育研究助成成果報告書

報告書提出年月日	2020 年 3 月 27日
研究・研修課題名	がんのリハビリテーション研修 資格取得のための研修補助
研究・研修組織名 (所属)	リハビリテーション部
研究・研修責任者名 (所属)	竹内 雪絵
研究・研修実施者名 (所属)	福代通人、大矢菜穂子、奥野智寛、田中和喜、大西友香

成果区分	<input type="checkbox"/> 学会発表 <input type="checkbox"/> 論文掲載 <input checked="" type="checkbox"/> 資格取得 <input type="checkbox"/> 認定更新 <input type="checkbox"/> 試験合格 <input type="checkbox"/> 単位取得 <input type="checkbox"/> その他の成果 ()
該当者名(所属)	福代通人、大矢菜穂子、奥野智寛、田中和喜、大西友香
学会名(会期・場所)、認定名等	がんのリハビリテーション研修修了(「がん患者リハビリテーション料」算定資格)
演題名・認証交付元等	一般財団法人ライフ・プランニング・センター(厚生労働省委託)
取得日・認定期間等	2020年1月26日
診療報酬加算の有無	<input checked="" type="checkbox"/> 加算有(がん患者リハビリテーション料) <input type="checkbox"/> 加算無

目的及び方法、成果の内容

①目的

当院はがん診療連携拠点病院として、がん患者へのリハビリテーションの提供が必須である。「がん患者リハビリテーション料」を算定するには指定された研修を修了した医師がリハビリテーションの処方を行い、研修を修了した療法士が担当することが条件となっている。がん患者は増え続け、早期退院にエビデンスのある術前の介入や術後早期の依頼も増えている。また、がん患者は再入院も多いため、研修を終えた現状の療法士の数では対応が困難となっている。今回、新たに「がん患者リハビリテーション料」を算定できる療法士を増やすために研修補助を行う。

②方法

2020年1月25日～26日において国立看護大学校(東京都清瀬市)で開催される、一般財団法人ライフ・プランニング・センターが主催する「第7回がんのリハビリテーション研修会」に参加する。これにはチームで参加することが要件として挙げられており、1チームには医師が1名以上、看護師1名以上、療法士2～4名の他職種共同で参加することが義務付けられている。今回は医師1名、看護師1名、療法士3名のチームによる参加とする。

③成果

第7回がんのリハビリテーション研修会へ参加し、研修を受講することで、がん患者のリハビリテーションを実施する上で必要な知識とスキルを習得することができた。

具体的な講義内容は、

- 1) がんのリハビリテーションの概要
- 2) 周術期のリハビリテーション(乳がん、頭頸部がん)
- 3) 周術期のリハビリテーション(開胸・開腹術後、脳腫瘍)
- 4) 化学療法・放射線療法の合併症とリスク管理
- 5) 造血器腫瘍・造血幹細胞移植に対するリハビリテーション

- 6) ADL・IADL 障害に対するリハビリテーション
- 7) リハビリテーションにおける看護師の役割
- 8) 口腔ケア
- 9) がん患者の心理的問題
- 10) がん悪液質に対するリハビリテーション
- 11) 進行したがん患者に対するリハビリテーション

と多岐にわたるもので、症例提示を交えた臨床に即したものであり大変参考になった。

また、多職種チームで参加する研修であり、

- 1) がんのリハビリテーションの問題点
- 2) 模擬カンファレンス
- 3) がんのリハビリテーションの問題点の解決

などのグループワークも充実しており、チームによる課題解決のためのディスカッションを通してがん患者のリハビリテーションに必要なチーム力を高めることができた。

またグループワークを通じて他施設の課題や問題点の解決などを聞くことにより、本院ができていないことが把握できたと同時に、解決策のヒントなどを得ることができた。

さらに今回、医師は研修医の参加であり、今後の担い手となる若い医師にがんのリハビリテーションの重要性を普及することができた。

今回の研修受講により、療法士3名が「がん患者リハビリテーション料」算定資格を取得することができた。がん患者リハビリテーション料を算定する場合は、がん患者へ体力低下が及ばないようにする予防的介入や、緩和期でも患者の希望の実現や在宅復帰を支援する介入などが行えるため、患者の日常生活動作の向上、生活の質の向上においてさらなる貢献が可能となった。

治療技術の進歩や早期診断・治療の傾向によりがんと共に生きる「がんサバイバー」が増加している近年、今後も増加し続けるがん患者に対応するべく、算定できる療法士数を増やすとともに、院内へがんのリハビリテーションを周知する活動を行いチーム力を高め、がん患者に質の高いリハビリテーションを提供したい。